

令和5年度第1回辰野町塩尻市小学校組合総合教育会議及び 塩尻市辰野町中学校組合総合教育会議会議録

令和5年度第1回辰野町塩尻市小学校組合総合教育会議及び塩尻市辰野町中学校組合総合教育会議が、令和5年9月26日、午後2時30分、小野農民研修センターに招集された。

会 議 日 程

- 1 開 会
- 2 組合長あいさつ
- 3 教育委員会あいさつ
- 4 協議事項
 - (1) 両小野の今後の教育環境について
 - (2) その他
- 5 閉 会

○ 出席者

【小学校組合】

組合長	武居 保男
教育長	宮澤 和徳
教育長職務代理者	小澤 晃
委員	竹澤 克彦

【中学校組合】

組合長	百瀬 敬
教育長	赤羽 高志
教育長職務代理者	古厩 一
委員	小松 恵美

○ 説明のため出席した者

両小野小学校長	小柳津 由紀
両小野中学校長	上條 勝利

○ 事務局職員出席者

【辰野町】

学校支援課長	小澤 靖一
学校支援課課長補佐 (教育総務係長)	宮原 隆史
学校支援課教育総務係	中沢 大輔

【塩尻市】

こども教育部長	太田 文和
こども教育部次長	熊井 美恵子

(教育総務課長)
教育総務課担当課長 五味 克敏
家庭支援課長 植野 敦司
教育総務課課長補佐 六井 雄三
(学校運営係長)
教育総務課課長補佐 小松 義宏
(学校支援係長)
教育総務課教育企画係長 佐藤 智樹
教育総務課教育企画係 主事 瀧沢 快斗

1 開 会

太田子ども教育部部長 皆様、こんにちは。ただいまから辰野町塩尻市小学校組合と、塩尻市辰野町中学校組合合同の令和5年度第1回総合教育会議を開会いたします。私は、塩尻市辰野町中学校組合教育委員会事務局子ども教育部長の太田文和と申します。本日の進行を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、次第に沿って進めてまいります。

2 組合長挨拶

太田子ども教育部部長 初めに両組合を代表して、百瀬中学校組合長から御挨拶をお願いいたします。

百瀬組合長 皆様、こんにちは。中学校組合長の百瀬でございます。開会に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。武居組合長、教育委員の皆様、本日はそれぞれ御多用のところ、御参集をいただき誠にありがとうございます。

本年度は新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類に移行しまして、以前の制限のない学校教育活動を取り戻し始めております。一例といたしましては、来月10月9日には、両小野学園音楽会「両小野ミュージックフェスタ」が開催されます。多様な他者との関わりを控えるよう要請されていましたが数年間のことを考えますと、学級・学年・学校を超えた交流ができることは嬉しい限りであります。日頃の練習の成果を十二分に発揮され、堂々と発表し合ってもらいたいと存じます。

しかしながら、感染症の対応が徐々に落ち着き始めた一方で、学校の教育現場には、そのほかに様々な課題がございます。社会の急速な発展に伴い、先を見通すことが困難な状況下ではありますが、学校では引き続き、子どもたちの学習がより充実したものとなるよう、支援していく必要がございます。

本日は、この両小野地区の今後を見据え、様々な観点から今後の教育環境の整備について御意見を頂き、子どもたちへのさらなる支援につなげたいと考えております。また、この会議を通じて、小学校・中学校の連携がよりスムーズになれば幸いに存じます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

太田子ども教育部部長 ありがとうございます。

3 教育長挨拶

太田こども教育部長 続きまして、両組合教育委員会を代表いたしまして、宮澤小学校組合教育長から挨拶をお願いいたします。

宮澤教育長 皆さん、こんにちは。小学校組合の教育長、宮澤でございます。今年度第1回目の総合教育会議に当たり、問題提起を兼ねて挨拶をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

小学校組合・中学校組合教育委員会に続いての総合教育会議になります。また、日頃から両小野学園を全面的に支援していただいております百瀬敬中学校組合長様、武居保男小学校組合長様には、本日も大変お忙しい中を第1回総合教育会議に御出席いただき、大変ありがとうございます。

さて、両小野小学校、それから両小野中学校とも、毎日児童生徒の笑顔が満ちあふれ、歓声が校舎に響いております。大変、ありがたいことだと思っております。しかし、今日的な課題が幾つかございます。先ほど話に出ましたコロナ禍も、小野の里では比較的落ち着いており、小中学校とも年度当初計画した教育課程は順調に執行することができております。ただ、一方でインフルエンザの流行の兆しもあるとの報道もありますので、油断せずに基本的な感染防止対策を取りながら、教育活動を進めてまいりたいと思っております。

この3年余にも及ぶコロナ禍は、社会の仕組みや在り方、それから人々の価値観さえ、大きく変えてしまいました。また、日本は少子高齢化社会に突入してはいたけれども、このコロナ禍はそれに一層拍車をかけてしまい、少子化が加速。年間の出生者数は、特にこのコロナ禍の3年間は予測を下回っており、危機的な状況でございます。国も、この危機感を持ち、今年4月こども家庭庁を創設し、少子化対策に取り組んでおりますけれども、これといった特効薬は今のところ生み出せておりません。

辰野町を例にして挙げますと、辰野町も急激な少子化が進んでおります。5年前、令和元年度の児童数は、両小野小学校も含めると974名。生徒数、これは辰野中学校の生徒だけになりますけれども、469名でございましたけれども、5年後の今年、令和5年度児童数は860名、生徒数は414名。僅か5年間で児童数が100名余、生徒数も50名余減少しております。両小野小学校、それから両小野中学校に限って言えば、両校とも単級でございます。各学年1学級ということになります。ここの児童、あるいは生徒が減少していくと、こういうふうに分けると分かりやすいかと思ひます。

この児童生徒の減少は、子どもたちの教育環境にストレートに影響を与えます。まず、1学級の人数の減少は、学びの集団が小さくなることを意味します。人間関係の固定化と、より多様な考えを基に、より深い学びを実現させることが難しくなる可能性がございます。この児童生徒数が最も顕著に現れるのは、先ほど教育委員会の中で中学校長も申しておりましたけれども、課外活動でございます。小学校では合唱と金管バンドなど、中学校では運動系や文化系の部活動がありますが、それらの部員の減少を意味します。迫力があり、重厚な響きを求める合唱だとか金管、また、サッカーや野球といったチームで勝負する種目は、人数が集まらなると成り立たないことも起こってまいります。活動する児童生徒も、少人数では満足感だとか成就感、達成感を得られない場合も今後出てくるだろうと思ひます。本来ならば、一学校内で部員の確保ができればよいわけですが、あまりに減少していきまると、やがて一学校内で部員を確保することが困難な状況にもなり、場合によっては、子ども自ら自分の活動を保障するために人数の多い学校のほうへ転校をするという、こんな子どもも出るこ

とも想定されてしまいます。

次に2つ目の課題として、先ほどから出ておりました大きな課題として、中学校の休日のみならず平日を含めた部活動が地域に移行されるということです。各自治体では現在、協議が始まっておりますけれど、いずれこの流れは小学校の課外活動にも必ず下りてくるはずで、両小中学校ともこの課外活動を、この憑（たのめ）の里として、いかに地域住民が支えていくのかという、こういう協議もこれから必要になってまいります。

3つ目、両小野小学校と両小野中学校は、昭和28年度から組合立の学校として今日まで輝かしい歴史と伝統を築いてまいりました。けれど、単に塩尻市と辰野町という行政が異なるだけではなく、学校所管の教育事務所が南信教育事務所と中信教育事務所に分かれて、人事も全く別という形になっておりますけれど、これがよいのか。これからの少子化、あるいは社会の急激な変化、人々の価値観の変化等を考えますと、この先においても、この憑の里の教育が組合立でよいのか、あるいは他の方法があるのか、一度立ち止まって検討していく必要のある時期に来ているのではないかな、そんなふうに思っております。

今日、学校教育も国の施策が大きく変わろうとしております。この変革期において、両小野学園の在り方について、どのような教育環境整備が今後必要になってくるのか、今日の総合教育会議において、皆様から忌憚のない御意見、御提言等、頂戴できればと、そんなふうに思っております。それでは総合教育会議、どうぞよろしく申し上げます。

太田子ども教育部長 ありがとうございます。

4 協議事項

(1) 両小野の今後の教育環境について

太田子ども教育部長 それでは、協議事項に入りたいと思います。初めに、両小野の今後の教育環境についてを議題といたします。はじめに、事務局から説明をさせていただきます。

熊井教育部次長（教育総務課長） それでは、私からは両小野学園がスタートしました経過につきまして、皆様にお伝えいたします。両小野の教育環境につきましては、平成23年4月に「地域」「つながり」「未来」をキーワードに、小中一貫教育両小野学園がスタートいたしました。地域とともに創造する新たな義務教育として、既存の小中学校の機能や施設を活用して、施設分離型の小中一貫教育を進めてまいりました。

小中一貫教育で目指す姿としましては、学校、家庭、地域が一体となり、「確かな知性」「豊かな人間性」「健やかな心身」知徳体の調和のとれた児童生徒の育成に取り組んできております。

枠組みとしましては、小学校、中学校という従来の枠にとらわれることなく、お互いの持つ指導のよさを生かし、9年間という大きな枠組みの中で児童生徒の発達段階に応じた指導を行ってきております。

特色のある教育活動としましては、起業家教育、キャリア教育の一環として、平成29年度から「空き家問題への中学生の取組」をアントレプレナー学習としてスタートし、また、ブリリアント活動は、地域人材を活用した各種講座を実施するなど、特色ある活動として展開をしてきております。

本日、お手元に両小野地区の児童生徒数の推移の資料をお配りいたしました。こちらも参考にさせていただきながら御協議をお願いいたします。

太田こども教育部長 ただいま事務局からの説明、それから宮澤教育長からも少子化に絡んだ問題提起等ございました。この場をお借りして、両教育長、それから教育委員の皆さん、学校長の皆さんで、忌憚のないところ、意見交換をしていただけると幸いです。いずれ近いうちに、今後の組合の在り方等を協議しないといけない場が出てくると思いますので、今日頂いた御意見が、生かされればいいかなと思っております。どなたか口火を切っていただきながら、キャッチボールをお願いしたいと思います。では、古厩委員からお願いします。

古厩教育長職務代理人 今、両小野学園の設立の経過や願いだとか、大事にしてきたもの等のお話がありました。一言で言えば、唐沢川を境に辰野西小、塩尻東小に分かれてしまうことがないようにというのが願いでありました。これから学校やその他、いろいろ協議する機会があると言いましたが、悠長なことを言っている場合ではないということ、まず申し上げたいと思います。

それから、もう1つは、両小野学園で取り組んできた中身を見てみると、やはり教科ではなくて、教科外のことで大きな進展があったと思います。両小野学園の一番の特色は、まず先生方が、たった4回ではありましたが、45分の合同職員会を行ってきた。ほかは、教育事務所やその他が分かれていますので、全く先生方の交流すらできないのが実情であります。

そして、合同音楽会、先ほど話がありましたけれども、先ほども中身を見せてもらって驚くのが、あれは両小野学園の音楽会というより、中学校の音楽会に保育園と小学校がちよつと入っているという、そういう感じがします。要するに、本当に小中の連携がなされてあのようなことができたのかと疑問に思います。

それから、もう1つの特色は、1か月の中学校への計画ができていましたけれども、今年中は途中で休日が入りますので9日間というのがありましたが、3年前に大激論があって3週間から2週間に変わったときに、何の相談もなく、そのようになってよいのかということがありました。

要するにこれも、なかなか小中の連絡すら思うようにできない。先ほど教育長がおっしゃられたように、本当に腹を割ってできるような、それにはやはり、いろいろ今の制約が大きすぎますので、本気になってこれを考えていかないと、両小野学園をつくった意味がなく、無残にも、唐沢川から名目も境にして分かれるような、本当にそんなことになりかねないくらい人数が減ってきています。

部活のこともありますが、それも問題ですが、それより一番の基のところ、子どもたちを、何十年後かの子どもたちをどういう子どもたちにしていくかという。この間、学園のほうで論議がありましたけれども、そういうのをちゃんと軌道に乗せて行けるような、そういうような学園運営協議会とかそういうところだけではなくて、とにかくそれができる、日常的にそういう取組ができるような体制に一刻も早くやっていただけるように、両教育委員会に本当にお願ひしたいと思います。以上です。

太田こども教育部長 ありがとうございます。結構、厳しい御意見もあったかなと感じているところです。今の古厩委員の意見に対してどうでしょう、皆様方。いや、そうは言ってもとか、賛同するとかあると思いますが。地域としてどうでしょうか。小澤委員、どうですか。

小澤委員 本当にこれは何とも、ここでいろいろ案をというのが、なかなか難しい段階かなと思います。先ほどこの表を見させていただいて、令和12年まで出ておりますが、これは2030

年のことです。2030年問題というのがあるって、気温が産業革命以降1.5度以上上がると、この先大変なことになるとか、65歳以上の高齢者が3割、30%以上を占めるような世の中にこれから突入していくとか、そういうところを考えていった場合に、ここで小手先でやってもなかなか動かないようなところがあるような気がするのだけれど、すばらしいものが出てくればいいのですけれども、なかなか難しいと思います。

それから、今から30年くらい前の1993年くらいに、そのときの小学生、中学生の男女比、それから考えて30年後、今の男女比がどうなっているか。簡単に言うと、その場所から離れないということになれば、子どもを産んだりして存続されると思うのですけれども。昔は30人以上、我々の頃は100人以上いたので、それから時間が30年経って、今、子どもたちがこんな状態だということは、それはどうなっているかという話も考えていかなければいけないかなと思います。今までの30年前の子どもたちが、そのままここにいるわけではないし、だから、その辺のところのバランスも考えていかなければいけないかなと。

これで本当に何とも言えないのだけれども、私も今どうしたらいいかなと思って。これは両小野だけではなくて、いろいろなところでそういうことが起こっているのではないかなと思います。両小野ばかりではなくて、全国こういう問題が起こっているのではないかなと思うので、そういうところでどんな工夫をしているとか、そういうところも考えて参考にしていってほしいのかなというふうに思います。以上です。

太田子ども教育部長 ありがとうございます。学校現場のほうはどうでしょう。両小野中学校長、何か御意見ありますか。

上條両小野中学校長 児童生徒数の推移が令和12年度まで出ているのですけれど、それが令和15年、今から10年くらい後になると、中学校の生徒数は30人台になります。今の年少さんだか年中さんが、ものすごく少ないということです。

今、中学校で来年度に向けて考えていくのは、生徒会の委員会の組織の再編成。本当に生徒がいないので、これから1学年20名を切っていくと、委員長、副委員長という形でやっていると本当に足りなくて、もしかすると2年生から副委員長を出すという、今の数でいくとそういうことになるので、そういったことを考えていきましょうと。

それと部活動についても、地域移行が始まる前の本校は、例えば剣道部が3年生と2年生しかなくて、それで次の年に1年生で剣道部に入る子もいなかったら剣道部を廃止しようということをしていましたが、地域移行があるのだったら今の部活動については残していましようということをやっているのですけれど。なかなか自分の好きな、やりたいことができないところもあるので、そういった部活についてもどうしていくのがいいのかということも、今職員の中では話題になっています。

それと、教職員の数も少ないので、本当に、1つの学校で400人の学校とうちみたいな65人の学校でも、学校の中の校務分掌は変わりません。でも、その変わらないところを少ない先生方でやっているの、先生方の仕事の量というのは本当に多いのですよね。だから、そういったところでも、教職員についての校務分掌の見直しということも来年度に向けてやっっていこうというふうに考えているので。何しろ厳しいですが、今年度70周年を迎えるのですけれど、伝統のある学校がなくなることがないようにしていくためには、どうしたらいいのかということで、皆さんでお考えを、お知恵を出していただければありがたいと思います。以上です。

太田こども教育部長 ありがとうございます。小学校長はどうでしょうか。

小柳津両小野小学校長 小学校は、辰野町とか北小野とか塩尻市とか、あまり子どもたちが分かれてやっているとこがないので、今のままがすごくいいなと思っています。お宮の中で御柱祭のときとかお祭りのときとか、両方の子どもたちが出会って、一緒に話をしたりお互いの神社に行ったりとかしている姿を見ると、すごくいいなと私は思っています。今度もし違う学校になってしまったら、お宮で会っても全く知らない子どもたち、知らない人たちがお宮の中で会うという状態になって話もしなくなるのかなと思うと、それはやはり寂しいことだなと思っています。

やはり人数が少ないので、小学校の中にも固定された人間関係の中で逃げ場がないというか、その中でうまくやっていかなければいけないということで、人間関係がちょっと崩れたときに、ちょっと厳しいとか悲しい思いをする子どもたちもいる。そういうところでは、人数が少ない中でずっと中学校まで長く、自己肯定感ではないですが、自分の自信とかそういうものがつくられる時期に、ちょっと友達とうまくいかなくなって自信を失ってしまったりとか、学校に行かなくなってしまうとか、そういうことがあるのはちょっと辛いなと思っています。そういう意味では、大勢の中にいることもいいなと、そんなふうに思っています。

太田こども教育部長 ありがとうございます。実際の地域での声というか、何か思いみたいなものが、それぞれ辰野町、北小野地区の委員のほうから何かあれば。竹澤委員、お願いできますか。

竹澤委員 正直、資料を見て暗い気持ちになったのですけれど、先ほど古厩委員がおっしゃっていた、辰野町側が辰野西小、塩尻市側の子どもたちが塩尻東小に分かれてしまうという、何か基準みたいなものがあるのでしょうかということをおもいました。どこまで減ってしまったら、学校がなくなってしまうのか。地域の人たち、こういう実情があまり分かっていないのではないかなと。こうやって数字として出されてしまうと、まずいなと思うのですけれども、だからといって、ではどうするのか。大本をたどると日本全体の問題でもあるのかなと思って。

そうは言っても、この地域のことから外れてしまうので、どうすればいいのでしょうかね。何か特色があれば、本当に人が移住してくてくれるのだろうかというのは思いますし、例えば、スポーツ特区みたいなものをつくって、ここで競技に一生懸命打ち込めるような環境をつくったとして、本当に人が集まるのだろうかとか。難しい。あと、施設分離型の小中一貫校ですけれど、では、一緒だったらよかったのだろうか。目的と手段を間違えないように検討していく必要がありますし、両方の地域で一緒に話し合ってもいいのかなと思えました。すみません、まとまらない話ですけれど。

太田こども教育部長 ありがとうございます。小松委員、お願いします。

小松委員 そうですね。周りを見ても子どもがいない。結婚している人もあまりいないという。若い方がいない、子どもよりもまず、若い人がいないという気がします。それで、いつもちょっと思うことは、軽井沢と小野と、どこが違うのだと、同じではないかと思うのです。結構自然が豊かだし、交通も結構いい位置にいるし。軽井沢なんて、小野や北小野だって場所的にはほとんど変わらないし涼しいし、どこが違うのだろうと思うけれど、どこかがやはり違うからこれだけ違うわけですよ。

でも、根本的には同じ田舎、山の中、気候的には涼しい、だけどここかが違うのです。そのどこかというのは何かというのが分からないのですけれども、さっき竹澤委員がおっしゃったように、何か地域色というか、そういうものがこれからどんどん必要になっていくとは思いますが。

それで、やはり子どもがいない前に若い人がいない、お年寄りが多いというような、これは、みんなどこも同じなのですから。若い人たちというか、今、移住してきている方も結構いらっしゃるのですよね。本当に子育て世帯の方とかが移住してきてくださったりしています。でも、そういう人たちが、なぜここがよかったのかとか、今、ここに来てどう感じているのかとか、やはりそういうことをよく伺って周りに発信してもらえると、どんなところがすばらしいのだよとか、こういうことは気をつけて来たほうがいいよとか。

地域的には、そんなに不便な場所ではないと思うのです。どこかに出かけるにしても、場所として考えたら、とてもいいところだと思うのです。とにかく子どもの人数を増やしていくには、やはりその前に若い世代の人たちにたくさん来ていただく、そのために情報を発信していくということもすごく必要だとは思いますが、難しい問題だと思います。

太田子ども教育部長 ありがとうございます。特色を生かした教育というところも出てきていますので、赤羽教育長、どうでしょう。檜川地区のお話を。

赤羽教育長 私は、皆さんご存じだと思うのですが、両小野小学校に行って両小野中学校を出ています。先ほど小柳津校長が、子どもたちは辰野町も塩尻市も全く関係ないと言いました。まさにそうなのです。この小野、憑の里に生まれて当たり前のように暮らしているのだけど、あなたは辰野町、あなたは塩尻市と意識したのは、本当に中学を過ぎた後半くらい。

便利なところだという話では、松本平の高校にも行けるし諏訪にも行けるし、私は伊那北高校だったので伊那にも行ける。その当時の小林校長は私に、君は教師になれよと言って、なるのだったら君は辰野町だから、伊那北高校に行かないとだめだと。先ほど宮澤教育長がお話しされたように、南信地区という形で、学校の担任や校長先生からアドバイスしていただきました。

先ほど小澤委員に言われたように、当時120人が学級にいたわけですから。私がいたときは3クラス、100人ちょっとでした。今年、両小野小学校の運動会に行って私が一番感じたのは、人数は少ないものの、この地域のよさというか、保護者の方、それからじいちゃん、ばあちゃん、地域の役員の方たちが応援する姿は、きっとそのときのままだと思います。

私は、この地から学校がなくなっちゃいけないと思います。山間、へき地、2校行ったのですけれども、どこへ行っても、一番お日様の当たる一番いいところに学校は建てられています。そのくらい学校は大事なところだということを、先輩方から教わってきました。

太田部長から言われた檜川小中学校のことをお話しします。私は大規模校、大規模校と教頭をやってまして、最初の学校は高森南小学校で770人くらいいて、次は吉田小学校でちょうど600人です。男子300人、女子300人ちょうどくらいの大きなところから、私は木曾檜川小の校長に赴任したのです。赴任したときから全く子どもたちも違うし、地域も違って来る。檜川のよさというのを校長としてとても感じて、これを生かそうということ。

大ききだけではなくて、ここで子どもたちが幸せに暮らしているというか、優しい子どもたち、すごく親切な保護者と地域の方でした。PTA総会も、ほとんどの保護者の方が来てくれて、一丸となって学校を支えてくれるのです。

そんな中で、当時全校 100 名だったのですけれども、私が出た 2 年後から 4 年後は 80 名と、僅かの間に人数が減っていたのですが、地域の方からいつも言われたことは、絶対にここに学校を残すと、その声が強くて、では、そのためにどうしたらいいかということ、地域の方がみんなアイデアを出し合ったり、アンケートをしたりしました。

最初は、一貫校という話もあって施設分離とか出たのですけれども、そうではなくて 1 つの校舎で 9 年間の学び、教育課程ができるような義務教育学校制度というものができた。それをぜひやっていきたいという強い希望がまとまりまして、塩尻市に要望書を出していただいて、それに向けて進めていこうという経緯があります。以上です。

太田子ども教育部長 檜川小中学校もこれで 2 年目になってきて、小さいながらも特色を生かした教育も、校長主導で進められているところもございますので、そういったところも 1 つのヒントになるかなという気がしています。

宮澤教育長からどうでしょうか。

宮澤教育長 先ほどから意見が出ておりますけれども、私は、400 年前の秀吉裁定のように、唐沢川でまた辰野町と塩尻市に切ってしまうという、分けてしまって、いつぞやの辰野西小と塩尻東小に、これだけはどうしても避けなければいけないと思う。

子どもの数で言っても、憑の里の子どもたちは、やはり憑の里で 1 つ。今まで大人ができなかった、大人が唐沢川で考え方が分かれていた。だから、御柱も今までは矢彦神社と小野神社と一緒にできなかった御柱が、子どもたちが 1 つになっているじゃないか、この姿を見て大人は恥ずかしくないのかと言って、1 つの御柱にしようと言ったのが、たかだか 3 回前です。

子どもたちは、その前からも唐沢川は関係ない、憑の里 1 つでやってきていますので。これはやはり、憑の里の子どもたちというのは、これから先も、10 年先、100 年先、どうなっていくか分からないにしても、ここでまた 400 年前の裁定のように分けてしまって、完全に知らないよとなってしまうのは寂しいと思うのです。

実は私は、この話も今まではずっと黙っていました。私が教育長になった 9 年前に、この地区の方とそういう話をしたことがあるのです。それは平成 26 年ですから、これを見ますと児童生徒数は、今の 1.5 倍いたのです。このときは、北小野も人口が減って子どもの数が減る、そうしたら今の組合立の小学校、中学校、距離も離れている、このままではずっと行かれないと、だから新しいことを考えなければいけないと言ったとき、9 年前です。えらく怒られました。今度の教育長は、何を考えているのだと言って、石でも投げられるのかというくらい、ものすごく怒られた。

一方で、やはりそうは言っても、組合立で 2 つの小学校、中学校が 1 キロも離れている。先ほど、施設分離型の小中一貫教育、これ、聞こえはいいのだけれど、1 キロ離れていると小中一貫教育というのは、正直言うととても厳しい。そうすると、この組合立というのをどうするのかということと、施設分離型の小中一貫教育という、しかも 1 キロも離れている、これをどうするかということは、やはり考えないといけない。

でも、これは教育委員会や塩尻市や辰野町だけで考えられない。これは、地域の方たちの熱い思いがあって組合立を国に出していますので。これは、地域の方たちにまず、考えが今、こういう状態だと、こうなっているのではないかと、子どもの数がこの際、こうだと。少なくとも一番最後、ここまでは出生数も分かっていますので、多少変動があるとしても、この数

字は確かなのです。この状態を見てどう考えるのかということで、地域に投げかけ、地域に意見をまず聞いてから考えていくことをしていかないと、9年前の私みたいに石を投げられなかったけれどそういうことを言われるのです。

でも、現実を見たときにどうするか。では、憑の里の子どもたち、小中学生の学びをどうするのか。1つ、1つでやってきた御柱が、3回前の御柱から合同の御柱でできたのと同じように、教育も子どもたちが1つに一緒に学びをしていきたい、では、どういうスタイルがいいのか。では、そうしたときに施設分離ではなくて、ここからは私の個人的なものだから消していただいてもいいです。やはり施設分離型では、まずいだらうと思うのです。

辰野町側でも塩尻市側でもどちらでもいいのだけれど、やはり施設一体型の小中一貫教育、つまり義務教育学校にしていくというのが、私は自然な流れではないかと思えます。これには、大きな決断がいります。地域の住民の決断と、それから両行政の決断が必要なのですが、この1キロという距離は、施設分離型でもあまりにも離れすぎている、そんな気がします。言いすぎてしまいました。

太田こども教育部長 ありがとうございます。相当御苦労されたのではないかと。

宮澤教育長 しょっちゅう怒られました。教育長の歓迎会の席で。

太田こども教育部長 これまで一通り皆さん方から御発言いただいているので、どうでしょうか。

古厩教育長職務代理者 今、宮澤教育長がおっしゃられた体制をどういうふうにしていくのか、それと一方、先ほどの小学校の組合の中で宮澤教育長がおっしゃった茨城県の義務教育学校の視察に行ってきた、この話を聞いて、まさにそこが大事なところです。文科省にしても県にしても、とにかく今までの教え込むような形ではなくて、打ち出しているような新しい形を。長野県の中では、多分これは、公立ではないですけども軽井沢風越学園がしたりしていますけれども、当面、こういう公立の学校を目指すと言いますか、教育の中身と体制と両面で考えていかないといけない。

最初のところは、住民感情その他難しいところがあると思えますけれども、教員に対しては、それに関しては反対する人は多分誰もいないと思えます。これを全面的に進められるような、これは両小野小中学校に限らない、辰野町にしても塩尻市にしてもそうですけれども、その両面で行かないとまずいのではないかと考えています。よろしくをお願いします。

宮澤教育長 先ほど、竹澤委員から、学校設置の基準について何かあるかということなのですが、小中学校においては、学校の設置者である市町村教育委員会で決めれば学校の設置ができる。統合なり可能です。国の法律で決まっているとかそういうことはないです。

太田こども教育部長 では、ここで両組合長にお願いしたいと思えます。

武居組合長 御意見ありがとうございます。非常に、このお題を論ずると何時間でもかかりそうですけれども、委員の皆さんのお話を聞いていて、やはり私たちが縛られているのは数だとか量、この価値観というものは非常に難しいところがあって、これに縛られなければまた別の発想が出てくるでしょうけれども、人口が減っている、学級も維持できないとか、その辺の論法で来られると、先がやはり見えなくなってしまうのです。

そういう中で、申し訳ないですけど私の個人的な生い立ちを言うと、私は辰野町の商店街で生まれ育ちました。昭和33年生まれですが、当時は本当にどんどん遠いところから、飯田市、伊那市のほうからも辰野町で商売をやれば儲かるという、そんな時代でしたので、

自然発生的に商店街が700メートルくらい伸びていきました。

当然、各町内ごとでも友達は二、三十名あつという間に集まるくらいの、そんな幼少時代を過ごしたのです。そういう中で当時の辰野町は、まだ一万五、六千人の人口でしたけれど、ちょうど私が保育園、あるいは小学校に上がる頃には、やはりどんどん人口が伸びていったのです。

小学校の5年生の社会科のテストで、担任の先生から、長野県で町の部で人口の多い1、2、3位を書きなさいという問題が出ました。これは私もずっと覚えているのですが、1位は丸子町、当時2万9,000人、2位は下諏訪町2万6,000人、辰野町は当時、2万4,000人まで伸びていきました。

子ども心にとって、人口が増えていることに関しては、すごく喜び、誇りみたいなそういうことを覚えまして、それだから、いまだに私は数に縛られているということ、とても思います。では、今のことを、丸子町は上田市に吸収合併されてしまった、下諏訪町は消滅可能性都市として、子どもを産める女性が本当に、辰野町以上に少ない。本当に危機的な状況です。

辰野町は、まだ消滅可能性都市ではないのですが、2万4,000人あった人口が、今もう1万8,000人を切ろうとしています。そういう中で、この学校の問題を考えたときに、管内で論ずると先は見えないのですが、やはり、数だけではなくて、その地域を愛して自分が誇りに思える、そんな教育ができないかなと、とても思います。

そういった意味では、両小野地区は、こんなに地域と学校が密接な地域はどこにもないと思って、これは全国的にも稀少価値のある地域だと思うのです。過去から多くの移住も出ていますし。そういう中で、少ない人数でもやっていける方策を見つけていかればというのが1つあります。

もう1つ、先ほど小松委員が、軽井沢とどこが違うのだとおっしゃいました。私も、あまり人には言っていないことがあって、私は辰野町を100年後には、軽井沢や小布施にしたいという思いがあるのです。ある職員に言ったら笑われてしまいました。町長、何ばかなことを考えているのだと。

ところが軽井沢だって、100年前は、ある皇族が縁を持ってくれたおかげで、では皇族が来れるような町にしよう。小布施だって葛飾北斎が来たから、その縁で60年で今の小布施になっているのです。軽井沢は人口2万人の町、小布施は人口1万人であるが、ここまで有名な町になった。そうすると人も入ってくれる。マイナスのことを考えずに、プラスのことしか考えられないようなまちづくりができる、これは本当にうらやましい限りなのです。私たちは、今の町長としての立場としては、とにかく50年後、100年後をにらんだ手を打っていきたいということを思います。

あとは、教育問題に関しては、少しでもこのマイナスの材料を何とか、我々の価値観を少し変更するようつもりで、何か誇りに思えるような教育ができないかということだけ、目指していきたいという考えでいます。

太田子ども教育部長 では、百瀬組合長からお願いします。

百瀬組合長 武居町長が生い立ちの話をされたので、私も生い立ちの話だけさせていただくと、私も今から45年前くらいが小学生だったので、その45年前で小学校の同級生が10人しかいない、全校生徒が80人くらいの学校で小学校時代を過ごしました。

その学校は、檜川地区の学校なのですけれども、今、檜川小学校に統合をしてしまって、贅川小学校というのですけれども、その小学校はありません。小学校がなくなると地域はどうなるのかというと、確実に衰退します。やはり地域にとって小学校は、かなり学校そのものがシンボリックな存在であって、そういう学校がない地域というのは、恐らく地域の体をなさないのではないかと、そんなふうに思っています。

そして、小学校が統合して檜川小学校と一緒にしたのですけれども、その檜川小学校も小学校として維持ができずに、今、義務教育学校ということで檜川の小中学校になっている、そんな状況になっています。

ちょうど塩尻市も、来年から第六次総合計画をつくっているのですけれども、塩尻市の教育振興基本計画は今年が最後の年なのです。辰野町さんも教育振興基本計画があると思っていて、この両小野学園は、計画上どういうプランの下にひもづいているのか、もしかしたら見えていないところも、知らないだけで計画があるのかもしれないのですが。

太田こども教育部長 基本的に、ここだけの計画というのはいないです。

百瀬組合長 学校と地域を巻き込んで、そういう計画も1本つくる議論を始めていくと、将来この計画というものをある程度、10年くらいのビジョンみたいなものを見据えておくと、皆さんと一緒にこの学校、この地区をどうしていこうという議論が深まって、いい方向に行くのかな。まずは、やはり先ほど数値の現状とか、そういうお話もありましたけれども、やはり現状をしっかりと把握した上で、数字から見える近い未来を見据えて、今何をやるべきかというのをきちんと、これは教育の方も行政も、そして地域の方もお話をしないといけないのかなと思っています。以上です。

太田こども教育部長 ありがとうございます。

それでは、次に移りたいと思います。

(2) その他

太田こども教育部長 その他でございますけれども、何か今回の件以外でも結構ですが、共通認識しておく必要があることとか、何かございますでしょうか。よろしいですか。

5 閉会

太田こども教育部長 それでは、以上で本日の協議は全て終了となります。これにて閉会したいと思います。大変ありがとうございました。

○ 午後3時20分に閉会する。

以上

【辰野町塩尻市小学校組合】

組 合 長

教 育 長

同職務代理者

委 員

記 録 職 員
学校支援課教育総務係

【塩尻市辰野町中学校組合】

組 合 長

教 育 長

同職務代理者

委 員

記 録 職 員
教育総務課教育企画係
